

木奥家所蔵大工道具調査

1 はじめに

1996年・2010年に、奈良市の木奥家から大量の大工道具が発見された。文化遺産部建造物研究室では、歴史的建造物の技法に関する基礎資料収集の一環として、2009～2010年度に、木奥家所蔵大工道具および春日座大工関連史料に関する調査をおこなった。

2 春日座大工と木奥家の歴史

木奥家は近世後期に春日座十六人大工の一員として名が現れる木興喜太夫家で、明治初期に「木興」から「木奥」に改姓している。春日座大工とは、13世紀末に成立した興福寺の伽藍と春日社の社頭の造営を独占的に担った大工集団の近世における呼称である。過去帳・墓碑銘等から調査した結果、木奥家の家系は元禄年間まで遡ることができ、天明元年（1781）没の小四郎以降の5名が大工であった。うち4名が春日社の第48次（1764年）・第51次（1823年）・第52次（1842年）・第53次（1860年）の式年造替に参加しており、また3名が春日座十六人大工として「喜太夫」を名乗っていたことがあきらかになった。

春日社の式年造替は、第53次を最後に新築再建という形式を終え、明治2年（1869）には春日座十六人大工の太夫名が廃止され、春日座は終焉を迎えた。木奥家は、最後の春日座十六人大工であった喜太夫の息子である木奥喜七の代まで大工に携わったが、喜七は明治に入って比較的早いうちに大工を廃業した可能性が高いことが近代史料より推定される。また、喜七以前の木奥家の所在は南城戸町で、喜七の養子由松が大正14年（1921）に転居をしているが、転居後の建物の前歴から、大工道具および大工関連史料は木奥家が転居の際に処分せず持ち運んだものとみられる。

3 春日座大工関連資料

木奥家には木箱に納められた大工に関する史料が伝わる。史料は大半が江戸時代後期のもので、数点が江戸時代中期にまで遡る。明治時代の史料は大工と関係しておらず、明治維新時に春日座大工が消滅し、木奥家が大

工に携わらなくなったことにあわせて、大工関連の史料も集積されなくなったとみられる。

史料のうち、春日社造替に関係すると思われるものは「春日社丈尺之記」の写し、そのほか春日社撰末社の造替仕様帳、春日社撰末社の図面類などがある。これらには年号とともに木興喜太夫の名前が多く残り、木奥家が春日社のどの社殿の造営に関わったかを示す貴重な史料である。類似の史料には、木奥家と同様に春日座大工を務めた中西家の旧蔵史料¹⁾があるが（現春日大社所蔵）、その「旧中西家文書」と並んで、春日座大工・春日社建築に関する基礎史料と考えられる。本調査では木奥家史料とともに「旧中西家文書」との比較をおこない、以下のことがあきらかになった。

造替の際には、その仕様を記した帳簿を使用するが、式年造替については以前の記録を使用することにより、前代以前の規範を維持してきた。江戸時代後期の春日社においては、規範は「春日社丈尺之記」に集成されていたが、社殿の細部の仕様は造替ごとに少々変更されることがあり、そのような変更点を反映させながら、造替仕様帳は作り替えられ、伝来されてきたのである。また、十六人大工家間での史料の移動があったこともあきらかになった。

4 木奥家所蔵大工道具

今回調査をおこなった木奥家所蔵の道具類のうち、194点が大工に使用されたと考えられる道具類である。そのうち細かな破片を除いた、完形品または種類が十分判別できる道具類は152点である（表4）。本調査では、大工道具の実測調査を中心に、形状・機能による分類を類例・文献をもとにおこなった。

道具は大工の作業工程により、墨掛道具類、斧、鋸、鑿、槌、錐、鉋、刀子系道具、道具調整用道具、組立用道具、雑道具・その他の11種類に分類できる²⁾。木奥家所蔵大工道具にはこの11の大分類すべての道具が残されていた。

墨壺・矩・木槌・金槌・砥石・釘抜など、近世の伝世品や近・現代の大工道具標準編成³⁾と比較してみると、木奥家から失われたと考えられる道具もある。しかし、大工道具の標準編成にみられる大半の種類の道具を残しており、特に鑿・鉋の種類・点数の多さは近世伝世品一

括資料の中で群を抜いている。さらに、造作材用の鋸の種類・点数が多い、鋸など標準編成に見られない仕上げの道具を有するなど、木奥家の宮大工としての職能を十分に示した道具群である。口引、逃挽鋸、メハジケは近世に遡る伝世品が確認されたのは初めてのものである。壺鑿や三又錐など、大工で通常使用しない大きさの道具、または他の木工職で用いる道具の流用も注目すべき点である。木奥家所蔵大工道具は、個々の道具の形状には近世道具の特徴がみられるものが多く、近世に遡る道具群とみてよいであろう。

5 おわりに

近世以前の大工道具の実物資料は限られている。木奥家所蔵大工道具は、近世まで遡る実用品の大工道具の一括資料としては管見の限りでは5例目である。宮大工の道具に限ると、藤井家旧蔵・周防国分寺造営大工道具（山口県、18世紀後半）、桃山天満宮所蔵『坂田岩次郎奉納大

工道具』（京都府、天保12年＝1841）につづく資料であり、それらの中でも種類・点数の多さは群を抜く。このように質・量ともに恵まれた一括資料の発見は、大工道具の歴史を解明する上で、きわめて重要といえよう。

近世の木奥家は春日座十六人大工木興喜太夫家としての歴史が史料よりあきらかである。近代の木奥家は明治に入って早々に大工を廃業したものとみられ、大工道具は近世末の揃いであることがわかる。木奥家所蔵大工道具は、こうした木奥家の大工家としての歴史とともに評価されるべきであろう。

（番 光）

註

- 1) (財) 春日顕彰会『春日大社 摂末社等建造物調査報告』、1986。
- 2) 渡邊晶「近世後半における大工道具について」『オランダへわたった大工道具』国立歴史民族博物館、2000の表1を参照。
- 3) 村松貞次郎監修『わが国大工の工作技術に関する研究』(財) 労働科学研究所、1984。

表4 木奥家大工道具種類別点数一覧

大分類	種類	点数
墨掛道具類	5	18 (うち近代3点)
斧	2	4
鋸	5	17 (うち刃断片7点)
鑿	10	29 (うち刃断片3点)
槌	1	1
錐	7	22
鉋	14	57 (うち鉋身のみ12点)
刀子系道具	2	4
道具調整用道具	2	24 (うち刃断片17点)
組立用道具	1	7
雑道具・その他	5	11
計	54	194
完形品かそれに近い近世の道具		152



図39 木奥家所蔵春日座大工関連史料



図40 木奥家所蔵大工道具